



見えない子供たち

亜紀の眼差し

春日信彦

孤独な呼吸

亜紀は冷蔵庫をゆっくりと開けた。当然のごとくお腹を満たすものは何も入っていなかった。入っているのは缶ビール二本だけだった。4歳の亜紀と2歳の俊介は昨日の夕方から何も食べてない。母の知美が家を出てから四日目になるが、いまだ帰宅しなかった。冷蔵庫にはスティック・パン2本、スライスチーズ3枚、スライスハム2枚、ヤクルト3本、3分の1ほど残ったパック入りヨーグルトと缶ビール二本が入っていた。二人は三日間で食べられるすべてを食べつくした。

俊介はキッチンの隅にあるオマルに座り親指をしゃぶっていた。オマルからの悪臭は部屋に立ち込めていたが、二人の嗅覚は麻痺していた。俊介は薄汚れた垢だらけのTシャツの下は何もはいてない。亜紀も二ヶ月間同じピンクのワンピースだ。スキンヘッドの男が出入りするようになってからは知美の二人に対する態度が一変した。男が二人を嫌ったからだ。男がコーポにやってきたときは納戸同然の四畳半に閉じ込めて黙って寝るように言いつけた。男と亜紀は隣の六畳の部屋で缶ビールを飲みながらテレビを見た。

亜紀と俊介の父親は、今はいない。二人の父親である知美と同棲していた男、康介は一年前に失踪した。知美と康介は入籍していなかった。知美は未婚の母となったが、半年前にスナックのお客であった秀樹と出会って、彼のマンションにたびたび通うようになった。子供を無視して秀樹のマンションに泊まるようになってからは、亜紀と俊介は冷蔵庫にあるものを食べるようになった。

亜紀は冷蔵庫を閉じるとキッチンのフロアに転がっていたガンダムの茶碗を拾い上げた。そして、流しの前に置いてある椅子によじ登り少し蛇口のコックをひねって茶碗に水を入れた。茶碗を一度流しの横の平たいところに置くと、亜紀はひょいと飛び降りた。亜紀はこぼさないように茶碗を両手で包むように持ち上げてゆっくりと歩き俊介の頭の横に正座した。亜紀は右手を頭の後ろに入れて、フロアに寝転んでいた俊介の頭を起こし茶碗を口元に当てた。俊介はチュウチュウと飲み、少し残して、首を振った。

俊介は小児喘息で発作的に咳き込むが、今は治まっていた。亜紀は六畳間のドアを開けると中をじっと見つめた。この部屋には入らないようにしつこく言われていた。スキンヘッドの男は子供の匂いがするとかんしゃくを起こした。少し脚がすくんだが、一步足を踏み入れた。一気に扇風機に突進するとコードを引き抜き、扇風機を引きずってきた。俊介の頭の前に置くと壁のコンセントにコードを差込、タイマーを回した。生ぬるい風が時々咳き込む俊介の身体を包み込んだ。

亜紀はもう一度冷蔵庫を開き、製氷ボックスの氷を親指と人差し指でつまみ上げ、一個口に含んだ。二人はこの半年間外出したことがなかった。時々見る人間は鬼のようなスキンヘッドの男と他人のような母親だけであった。亜紀は半年前から孤独に耐えられる人間に変化していた。俊介は食事が偏り、かなりやせていた。かつてハナと言う猫を飼っていたが、猫嫌いのスキンヘッドはハナを蹴飛ばしては窓から部屋の外に放り投げた。しばらくすると、ハナは戻ってこなくなった。

亜紀はもう一度六畳間を覗き込み、じっとテレビを見つめた。チェック模様の小さな正方形をしたテーブルに駆け寄ると、その中央に置いてあったリモコンを手に取り赤いボタンを押した。しばらくすると、テレビの画像が現れた。音声が入ると頬が緩み、俊介の所に戻った。俊介はぐっすり眠っていた。ミッキーの丸い壁時計は11時を回っていた。亜紀は俊介の寝顔をじっと見つめていたが、思い出したような笑顔を見せると流しに駆け寄り、その下の引き戸を開けた。

そこには醤油のボトル、みりんのビン、さとうの袋、塩の壺があった。早速、砂糖の袋を取り出し、一つまみして舐めた。亜紀は笑顔を作り俊介の寝顔の横に正座した。大の字に寝込んだ俊介の肩を数回揺さぶったが、眼を覚まさない。亜紀は砂糖を一つまみすると俊介の口に押し込んだ。しばらくすると、俊介の寝顔が少し動いた。そして、口を動かし始めた。俊介は眼を開き小さな笑顔を見せた。だが、うつろな瞳は何も語ることはできなかった。

亜紀はそっと俊介の少ない髪の頭をなでた。突然、亜紀は目を輝かせて冷蔵庫を見た。そして、頬をフロアに押し付け笑顔を見せた。一ヶ月前の記憶はそのままであった。冷蔵庫の下には100円玉が輝いていた。亜紀の小さな指先は100円玉を引っ張り出した。そして、右の手のひらに乗せ、左手で埃を払いのけ、ゆっくりと握り締めた。一瞬、俊介の寝顔を見つめ、無言でそっと立ち上がった。

亜紀は赤いサンダルを履き、そっとドアを開け静かにしめた。コーポの前の細い道に出ると、南に向かって約40メートル先の角にあるコンビニにまで駆けて行った。しばらく、コンビニのドアの前に立っていると中学生の男の子がやってきた。男の子がドアを開けると後について一緒に入っていった。男の子は入るとすぐに右に曲がり雑誌のコーナーに向かったが、亜紀はレジの前を通過し奥のレジの前を右に曲がり8歩数えた。このコンビニには一年前に母親と一緒に一度だけ買い物に来たに過ぎなかったが、パンのコーナーの場所はイメージに残っていた。棚の一番下のスティック・パン98円を発見すると右手で掴みレジに持っていった。

亜紀は背伸びして右手のパンと左手に持っていた100円玉を台に置いた。レジの女の子はパンをビニール袋に入れ、亜紀の左手に手渡すと、おつりの2円を落とさないように亜紀の右手にしっかり握らせた。亜紀は黙ってレジの前を去り、入口横のレジで会計を済ませた中年の男性がドアを開けるのを待った。その男がドアから出るとき、その後について外に出た。細い道に戻ると駆け足でコーポに向かった。ドアを静かに開けるとキッチンの隅に俊介の汗をびっしょり掻いた苦しそうな寝顔があった。扇風機は止まっていた。

亜紀はすぐに扇風機のタイマーを回し、転がっていたガンダムの茶碗を拾い上げた。そして、流しの前に引き寄せた椅子によじ登り、茶碗に水を半分ほど入れた。茶碗を持って俊介の頭の横に正座すると砂糖の袋に指を突っ込み、砂糖を茶碗に入れた。亜紀は思い出したように眼を大きく開くと、すっと立ち上がり、流しに駆け寄り、流しの横に置いてあった小さなスプーンを左手に取った。さっと駆け戻り、俊介の頭の横に正座すると、砂糖水の茶碗を右手に取り左手の小さなスプーンでゆっくりかき混ぜた。

俊介は死んだようにぐっすり寝ていた。「シュン、シュン」と肩をゆすって起こしてみたが目を覚まさない。亜紀はスティック・パンの袋を両手で開けようとしたが開かなかった。しかめっ面の亜紀はパンの袋を俊介の頭の横に置くと、椅子を押しやり流しの下の開き戸を開け、包丁たての小さな果物ナイフを左手で引き抜いた。ナイフの先を上に向けて正座すると袋をナイフの上に置いた。ナイフは袋に突き刺さった。袋をナイフから取り外すとナイフを包丁たてに戻した。

袋は簡単に開いた。スティック・パンを一本取り出し半分がちぎり、ちぎれた口を砂糖水にしばらく浸した。亜紀は人差し指を砂糖水に入れて、濡れたその指で俊介の唇をなでた。何度か唇を動かしていると俊介の瞼が少し動いた。「シュン、シュン、パン、パン」と言ってやわらかくなったパンの先端を俊介の口に押し当てた。口をあけた俊介は少しずつ食べ始めた。俊介にはまだ食べる気力が残っていた。俊介が半分のパンを食べ終わると亜紀は俊介に笑顔を見せた。

ほっとした亜紀はちぎった半分をゆっくりよくかんで食べた。残り5本のスティック・パンが入った袋は冷蔵庫の中段に入れた。残った砂糖水は流しに捨て、きれいに洗った茶碗は流しの横に置いた。俊介は食べ終わるとまたぐっすり寝てしまった。一ヶ月ぐらい前まではキッチンを走りまわったり、ボールを転がしたり、亜紀に飛びついたりしていたが、ここ最近は暑さのせいかほとんどフロアに寝転がっていた。

度重なる知美の外泊が俊介の心から元気を失わせているようだった。スキンヘッドの男と知美が付き合うようになって、子供二人との会話が極端に減った。仕事帰りが遅いこともあったが、二人に対する気配りがなくなり、よそよそしくなった。手作りの食事が減り、出来合いのものを買ってきては、えさをやるように二人に与えた。最近では、俊介を抱きしめることもなくなった。

知美の実の母親、正子は3歳のとき事故でなくなった。知美が5歳のとき父、俊太郎は再婚し、2年後に知美の腹違いの妹、葉子が生まれた。知美は継母、和歌子とはうまくいかず、高校1年で中退すると、フリーターとして自立した。父は2年前にすい臓癌でなくなり、継母は昨年、脳梗塞で倒れ入院した。2歳下の妹は高校卒業後、生命保険会社の営業所事務員として働いている。

知美と妹との関係もうまくいかず、家を飛び出してからは一度も連絡を取ってない。亜紀と俊介のことは、両親はもとより妹もまったく知らない。ライブハウスで働いていた知美は定期的にライブ活動を行っていた5人グループのドラマー康介と知り合い、同棲するようになった。同棲3年後、知美が20歳のとき亜紀が生まれた。2歳年上の康介は3日後には亜紀の出生届をし、父親としての振る舞いをしたが、二人は婚姻届を出そうとはしなかった。

知美は法律に縛られた結婚を望まなかった。フランス人の結婚形態にあこがれ、お互い自由でありたいと康介に婚姻届を強制しなかった。亜紀が生まれたとき、康介は父親になることを知美に断言したが、突然、バンドが解散し、康介は失踪した。メンバーの二人は警察の取調べを受け、康介にも捜索願が出されたが、いまだ発見されていない。康介の失踪は謎に包まれ、何かの事件に巻き込まれた可能性もあった。しかし、康介らしき男性の遺体発見の報道はいまだない。康介が失踪後、知美は一人で子供二人を育てる決心をしたが、秀樹が現れてからは心がゆがんでいった。

知美は4日目も、5日目も帰宅しなかった。6日目の朝、8時、亜紀は突然目を覚ました。いつもならば10時ごろ目を覚ますのだが、夢の中で俊介が泣いていたからだ。キッチンのフロアで、子供用の毛布を丸めた枕で亜紀は俊介の隣に寝ていた。眼を覚ました亜紀は俊介の寝顔をじっと見詰めた。顔色が少し青かった。「シュン、シュン」と叫んで肩をゆすったが、まったく死んだように身動き一つしなかった。

俊介の頭の横にあった黄色のタオルを手に取り、額を拭こうとしたが、タオルは生暖かかった。亜紀は左手にタオルを掴み、立ち上がるとバスルームにかけて行った。蛇口の下にタオルを置き、蛇口のコックをひねった。勢いよく流れた落ちた水道水に濡れたタオルを足元に引き寄せ、両足で5, 6回踏んだ。まだ、雫が垂れているタオルを3回折りたたみ両手の上に乗せ、俊介の頭の横に正座した。俊介の寝顔を見つめながら、黄色いタオルを額の上に置いた。すぐに、俊介が眼を覚ますと思ったが、表情は硬いまだだった。

亜紀はすっと立ち上がると、流しの前の椅子によじ登り、茶碗に水を溢れさせ、茶碗の水を口の両端からこぼしながら一気に飲み干した。椅子から飛び降りた亜紀は流しの横の1円玉二つのうち一つを摘み上げ、左手に握り締めた。しばらく、直立して俊介を見つめていたが、眼を吊り上げてコンビニに向かった。亜紀は1円玉一つでは何も買えないことを知っていた。

左手に1円玉を握り締めた亜紀は全力で角のコンビニにまでかけて行った。コンビニの重たいドアの前に立つと、左肩で思いっきりドアを押した。中に飛び込んだ亜紀は正面奥まで突進した。思いっきり右腕を振り上げ、右手の人差し指を男の子がイラストされたヨーグルトに向けた。そして、左横のレジのおばさんを睨みつけた。びっくりしたおばさんはレジから飛び出しヨーグルトを亜紀に手渡した。

亜紀は1円玉とヨーグルトを台の上に置くと、また、じっと、おばさんを睨みつけた。あっけにと取られたおばさんは、1円では買えないよ、と言いかけたが、突然、胸が熱くなり不吉な予感がした。急いでヨーグルトを袋に入れ、レジから飛び出し亜紀に袋を手渡した。これほどまでに怒りをあらわにした少女におばさんは動揺した。おばさんはここのコンビニのオーナーの奥さんで子供を3人育てていた。

子供の怒りは親へ何か訴えるときの行為であることを知っていた。お婆さんはきっとこの子は助けを求めているに違いないと直感した。お婆さんはすぐに出入口のドアを開け、亜紀を手招きした。亜紀はドアを飛び出し、全力でコーポに駆けて行った。お婆さんは女の子にレジを任せ、亜紀の後を追いかけた。亜紀が飛び込んだドアを確認したお婆さんは、呼吸を整えてゆっくり2回ノックした。

お婆さんはゆっくりドアを開けると、亜紀が「シュン、シュン、シュン」と泣き叫んでいた。「大変！」と叫んだお婆さんは、すぐに、コンビニに引き返し、救急車を呼んだ。二人は子供病院へ運ばれ、俊介は集中治療室に運ばれた。だが、俊介の息は消えていた。栄養失調と熱中症による死であった。亜紀には俊介の死を知らせなかったが、亜紀は俊介が天国に行ったことを感じ取った。

個室のベッドに運ばれた亜紀は目を閉じ硬直していた。小児科医は亜紀に声をかけたが、まったく返事がなかった。体温、眼球、脈拍、心電図には異常なかったが、眼を閉じたまま一言も声を発しなかった。水も食事もまったく受け付けなかった。このままでは亜紀の命が危ないと判断した担当医は、小児精神医学の権威である安部ドクターに支援を求めた。緊急の連絡を受けたドクターは子供病院へ飛んでやってきた。

ドクターは亜紀をじっと見詰め、声をかけたがやはりまったく反応がなかった。ドクターの顔が青くなった。極度の人間不信と俊介の死のショックから亜紀は、自らすべての感覚を麻痺させていた。失神状態を自ら作り出し、そこから脱却できなくなっていた。ドクターはさやかに連絡を取った。亜紀を救えるのはさやかしかいない、と即座に判断した。

子供病院に駆けつけたさやかは亜紀の硬直し死んだような寝顔を見つめ、血の気が引いた。さやかは神に祈った。亜紀をお助けください。そして、さやかはベッドに仰向けになり、亜紀を胸の上に置き、しっかり抱きしめた。二人は無言で一昼夜を過ごした。翌日の10時ころ、亜紀は目を覚ました。亜紀のかすかな動きを感じ取ったさやかは、そっと亜紀の頭をなでた。さやかの目じりからは涙がこぼれ落ちていた。

さやかの名案

意識を取り戻した亜紀は2週間後に退院することになったが、亜紀を引き取る身内が誰一人いなかった。今回の事件は新聞、テレビで報道されたが、母親、知美からの連絡はなかった。唯一の身内からの連絡は腹違いの妹、葉子からであった。しかし、亜紀の祖母、和歌子は入院しており、葉子も引き取って育てることはできないと病院に返事した。結局、亜紀は児童養護施設に預けられることに決定したが、さやかは反対した。亜紀の精神はさやかがいるときのみ安定しているが、それ以外の人が入るとパニックを起こすからだ。

しばらく安部総合医療センターに亜紀を入院させ、さやかが面倒を見る事をドクターにお願いした。ドクターはさやかに何か考えがあると見て承諾した。さやかには亜紀を育てることができる唯一の人物がひらめいていた。その人物は拓也であった。アンナにも亜紀の経緯を話したところ、アンナも拓也しかいないと賛成した。早速、二人は引っ越したばかりの拓也の自宅に出向くことにした。

拓也は糸島市の平原遺跡近くの一戸建てに5月に引っ越したばかりであった。拓也は平原遺跡に卑弥呼がいたと信じていた。そのこともあって平原遺跡の近くに家を買った。5LDKの二階家だが、土地が安かったため3000万で購入できた。一階は和室2部屋、洋間1部屋、リビング、キッチン、二階は洋間2部屋の間取りで、瞳との結婚も考えてローンで購入した。住宅金融公庫のローンを組んだが、頭金1000万を支払い、月々の支払いは少なく済んだ。

ドクターに紹介してもらった予備校の収入は生活していくうえでは申し分なかった。自宅の前には小さな庭と家庭菜園ができるほどの畑があり、自分で食べる野菜を栽培する計画を立てた。拓也にとって初めての田舎生活であったが、都会から引っ越してきたことは正解だと確信した。父親が住んでいる姫島まではここからは近く、たびたび会えることが最大の喜びであった。交通手段としてプリウスを使っているが、今後、バイクの免許を取って史跡巡りをしたいと意気込んでいる。

金曜日の早朝、出勤前にさやかから携帯が鳴った。土曜日の11時ごろ訪問するという一方的な話であった。さやかであればいつ来ても差し支えない客なので即座に了解した。二人は福岡空港から筑前前原駅まで地下鉄に乗り、駅からタクシーに乗って、予定通り11時10分に到着した。さやかのことだから何かのたくらみがあることは、さっしはついていたが、はるばる東京からやってきたねぎらいをしなくてはとお寿司の出前を取った。

二人をリビングに案内し麦茶を出していると、さやかが真剣な顔をして、お願いがあるの、と切り出した。拓也は田舎に引っ越してきて都会に住んでいたときよりおおらかな心になっていた。東京からはるばるやって来てくれたことだから気持ちよく引き受けてやる心積りでいた。まず、さやかの話を適当に聞いて、12時にお寿司の配達を予約していたので、それまで田舎の話をすることにした。

「さやかさん、お願いって、なんだい？」拓也はとぼけたように笑顔で訊ねた。さやかは今まで見せたことのない真剣な顔で「お父さんになってください」さやかはきっぱりと大きな声で言った。拓也は笑顔を作って「僕は離婚してはいるが、お父さんだよ。いったい、誰のお父さんになればいいんだい」拓也は冗談を言った。さやかはしばらく黙っていた。「それでは、お願いします。亜紀ちゃんのお父さんになってください」さやかとアンナは二人そろって頭を下げた。

拓也はさっぱり意味がわからず、口をあけて、次に何を言えばいいかわからず、頭が真っ白になった。二人は頭を上げるとさやかは即座に亜紀の事情を話し始めた。話を聞き終えた拓也はあまりにも突然で、まったく承諾できない話に動揺し、返事の言葉を考えめぐねた。拓也はとにかくやんわり断ることにした。「事情は良くわかった。しかし、僕は亜紀ちゃんのお父さんにはなれない。僕もこの年だし、4歳の女の子をこの年になって一人で育てることは不可能だ。やはり、児童養護施設にお願いしたほうがいいと思う。二人も僕の気持ちはわかってくれるはずだ」

拓也は精一杯の誠意を持ってこの話を断った。さやかはしばらく黙っていた。拓也が亜紀を育てることは本当に大変であることは十分承知していた。しかし、拓也以外の人間では亜紀を育てられないことははっきりしていた。「亜紀ちゃんは拓也以外に育てられないのよ。誰もできないの。お願い、拓也！この通り」さやかは両手を合わせてお願いした。拓也はまったくどうしていいかわからなくなった。「さやかさんがそこまでお願いされるんなら、亜紀ちゃんに一度会って見よう、それから考えさせてくれ」拓也は二人の真剣な態度に圧倒された。

亜紀の眼差し

拓也は二人に対抗するだけの気力がなかった。さやかの切なる願いはわからなくもなかったが、父親になるということは亜紀の一生の責任を負うことになる。このような重大事を簡単に承諾するわけにはいかなかった。さやかの願いを断るにはドクターの力を借りるほかないと思い、まず、ドクターに協力を願い出る作戦に出た。東京目黒区にある安部総合医療センターに出向き、ドクターと内密な打ち合わせをすることにした。

拓也は予備校に休暇届を出し、早速、金曜日の早朝、ドクターに会いに福岡を発った。ドクターには事前に亜紀の件を話したところ、ドクターもその件で相談したいとのことであった。拓也は久しぶりに院長室のドアをノックした。2回ノックすると軽やかなドクターの返事があった。部屋に足を踏み入れると、正面の院長デスクの向こうに笑顔のドクターが立ち上がった。「お久しぶりです。どうぞ」ドクターは真っ白いソファの前までやってくると拓也を手招きした。

亜紀の件をどのように言って断るか何度も思案しが、なかなかうまく話がまとまらなかった。しかし、ドクターには是非協力してほしいと懇願する心構えで福岡から出向いた。ドクターが拓也の前に差し出したコーヒーを一口すすり、少し緊張して口火を切った。「亜紀ちゃんの養子のことですが、ドクターから断ってもらえないだろうか。この年になって、若い亜紀ちゃんの一生の責任は取れない。ドクターならわかってくれるはずだ」拓也は落ち着いてゆっくりとお願いした。

「亜紀のことはさやかに一任したが、関さんに迷惑がかかるとは思わなかった。関さんがおっしゃることはごもっともです。まさか、関さんに養子の話をするとは夢にも思っていませんでした。しかし、私の口から断りを述べることはできません。やはり、一度、亜紀ちゃんに会って、それから詳しい事情をお話になって、断ってみてはいかががでしょう。さやかさんも、関さんの気持ちを踏みにじるようなことはしないと思います。早速、亜紀ちゃんにお会いになってみては？」ドクターはデスクの上の受話器を取った。

10分ほどするとノックの音が2回した。ゆっくりドアが開くと小さな可愛い女の子とその後ろにさやかが立っていた。亜紀はさやかに押されてドクターの横までやってきた。亜紀はさやかが買ってあげた真っ白のワンピースを着て、さやかの手をしっかり握っていた。「拓也、ありがとう。この子が亜紀ちゃん、可愛いでしょう」さやかは拓也が承諾するものと思った。拓也は少し緊張した口調で、「さやかさん、亜紀ちゃんは元気そうですね。返事は待ってください。今日は亜紀ちゃんに僕の顔を見てもらうと言うことでしたね」拓也は話が先走らないように釘をさした。

さやかは笑顔になった。「このおじちゃん、いい、おじちゃんでしょう。どう、亜紀ちゃん」さやかは亜紀の目を見つめ同意を求めた。亜紀はさやかを見つめ、ゆっくり頷いた。さやかはパチンと両手を合わせた。「これで決まりね。拓也、亜紀ちゃんがいいって。拓也もいいよね」さやかは一方的に結論をだした。「ちょ、ちょっと待ってくれ、僕の話も聞いてくれないか。確かに、亜紀ちゃんはいいい子だ。だけど、僕がお父さんになるということは亜紀ちゃんの一生の責任を取らなければいけないということだ。この年になって、こんな幼い子を育てることは僕にはできない。わかってくれないか」拓也は亜紀には冷たいようだったが、はつきりと断った。

さやかは亜紀の気持ちがわかっていた。亜紀はさやか以外の人に初めて心を許した。ドクターに対しても心を許さなかった亜紀が拓也には心を許した。決して人に笑顔を見せない亜紀が拓也にだけは笑顔を見せた。これは奇跡だった。このことはさやかにしかわからなかった。期待していた思いは一瞬にして打ち砕かれた。さやかはあきらめることにした。さやかは亜紀を見つめ部屋を出ようと亜紀の手を引いた。

さやかは亜紀の手を引いたが亜紀は動こうとしなかった。亜紀はじっと拓也を見詰めた。亜紀は信頼できる人に出会えたことに感激していた。「さやかさん、亜紀ちゃんが本当に僕でいいと言うのなら、お父さんになるよ。もう一度、聞いてくれないか？」拓也は亜紀の鋭く熱い視線を感じ取っていた。「亜紀ちゃん、このおじちゃんがパパになってくれるって、うれしい？」さやかは膝を折り、視線を亜紀に合わせ笑顔で尋ねた。亜紀は二度大きく頷き、涙を流した。

見えない子供たち

<http://p.booklog.jp/book/55741>

著者：サーファーヒカル

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/novel8686/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/55741>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/55741>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社：株式会社ブックログ